

● ヨハネの福音書 3章16節

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

この、ヨハネ3章16節のみことばは、聖書66巻の中でも最も有名な、そして大事なみことばである、といえるかもしれません。福音の真理の、すばらしい要約です。

私たちの信仰の本質は、この一節のみことばの中に、完全に示されています。

「神は、実に、そのひとり子イエス・キリストをお与えになったほどに、私を愛された。それは御子イエス・キリストを信じる私が、滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

このみことばを、聖書を見ないで、暗誦することができるようにしておかれると、とても有益です。そして、事あるごとに口に出して暗誦し、確認していますと、力を得ることができます。信仰に堅く立つことができます。

いつか私たちが迎える、地上での最後の最後の時でさえ、もはや目で読めず、口でとなえることもむずかしいほどになってきても、心にしっかりインプットされていれば、平安であることができるでしょう。

この、ヨハネ3章16節だけでなく、そういうみことばを、いくつか持っておかれることをおすすめします。

「詩篇23篇」のみことばも、私たちに平安を与え、力を与え、信仰にしっかり立たせてくれる、すばらしい神さまの約束のみことばですよ。

私は暗誦することができますが、皆さんはいかがでしょうか。少し長いですが、その気になって、覚えようと決心して時間をとりましたら、覚えることができるはずです。

その気にならないと、いつまでたっても、聖書を見なければなりません、マイペースで覚えてしまうまで、チャレンジしてみてください。

一度覚えてしまいますと、丁度自転車に乗るのと同じで、もう大丈夫です。心にインプットされて、私たちに、信仰と力と平安を与えてくれます。

詩篇23篇 ダビデの賛歌

- 1 主は私の羊飼い。
私は、乏しいことはありません。
- 2 主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいの水のほとりに伴われます。
- 3 主は私のたましいを生き返らせ、
御名(みな)のために、私を義の道に導かれます。
- 4 たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、
私はわざわざいを恐れません。
あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、
それが私の慰めです。
- 5 私の敵の前で、あなたは私のために食事をととのえ、
私の頭に油をそそいでくださいます。

私の杯は、あふれています。

- 6 まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと
恵みとが、私を追って来るでしょう。
私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。

そのほか、いろんな聖書のみことばを「心の小箱」に、宝物のように貯えておくといいいですね。

「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって、神があなたがたに望んでおられることです。」（テサロニケⅠ 5:16～18）

「信じる者は、神の栄光を見ます。」（ヨハネ 11:40）

「神を愛する人々のためには、神は、すべてのことを働かせて、益とさせていただきます。」（ローマ 8:28）

「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているように、すべての点でも幸いを得、また健康でありますように。」（ヨハネⅢ 2）

「見よ。わたし（イエス・キリスト）は、世の終わりまで、いつも、あなたとともにいます。」（マタイ 28:20）

「まことに、あなたに告げます。あなたは、今日、私とともに、パラダイス・天国にいます。」（ルカ 23:43）

私の場合、毎日のいろんな場面で、これらのみことばを、「心の小箱」から取り出してきて、暗誦して、力や知恵を与えられているのです。

神のみことばは、生きていて、力があります。

両刃の剣（つるぎ）よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

神のみことばは私たちに、知恵と力を与えてくれます。信仰と平安を与えてくれます。

旧約聖書・[申命記]の6章には、次のように記されています。

「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。

これを、あなたの子どもたちによく教え込みなさい。

あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい。これをしるしとして、あなたの手に結びつけ、記章として額（ひたい）の上に置きなさい。これをあなたの家の門柱に書きしるしなさい。」

このように記されているのですが、すごいでしょ！

あなたの毎日の生活のいろんな時、すわっている時、道を歩いている時、寝る時、起きた時、神のみことばを唱えなさい。みことばを書いて、いろんな所にはっておきなさい。

—— と、すすめられています。それを実行することにしましょう。そして、神の祝福をいただくことにしましょう。

さて、「ヨハネの福音書3章16節」のみことばです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛されました。」

神のひとり子・イエス様を、さばきの十字架につけて、死に至らしめること、このことが罪人である私たちに對して、神さまが、真実な愛をあらわすために選ばれた方法だったのです。

十字架上には、イエス様がはりつけにされておられますが、イエス様ではなくて、あなた自身が十字架に釘打たれ、はりつけにされている姿を思いえがいてみてください。

あなたの両手に、太い釘が打ちぬかれ、あなた自身が十字架にかけられ、罪のさばきを受けるべきなの

です。それが、神の前に罪人(つみびと)である、あなた自身が果たすべき自己責任です。

神の前に罪を犯した者は、当然のこと、神によってさばかれるのです。主なる神は、義なるお方です。きよいお方です。いかなる罪も、あいまいに認めて、いいよ・いいよ、とおっしゃる方ではありません。

私たちは、自分のなしてきたこと、なしてきた生き方、行動に対しては、責任をとらなければならないのです。あたり前のことです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」

ここで語られている「世」という言葉は、「罪にけがれた、世界と人々」という意味です。あらゆる罪人(つみびと)、あらゆる人達をすべて含めた“全人類”を意味しています。

神が創造し、いのちを与え、誕生させ、今も導いておられる全世界のすべての民です。

現在の全世界の人口は、64億人であるといわれています。その64億、すべての人間です。64億すべての人を、神は愛されているのです。

神さまの一方的な「アガペー」といわれる愛です。

「放蕩息子」のたとえ話に出てくる、父親が放とう息子を、いかなる状態であっても愛しつづけた愛です。立ち返るまで待ちつづける愛です。

あらゆる宗教の人がいます。クリスチャン人口は約32%・20億1900万人であるといわれていますから、残りの68%・43億8000万人の人たちは、違った宗教か無宗教の人たちで、神の愛など信じてはいないのです。

イスラム教の人たちがいます。仏教徒、ヒンズー教徒、真如苑の人たち、創価学会の人たち、生長の家の人たち、天理教の人たち、等々々。

神は、彼らにも生命を与え、誕生させ、今もいのちを与え、日々語りかけ、導いておられ、彼ら一人一人を愛しておられるのです。

神が、自ら、造られ、生命を与えておられる者で、どうなってもいい、滅んでしまってもいいと思っておられる人など、一人もあるはずがありません。

神は、実に、彼らを愛しておられるのです。そして、ひとりとして滅びることのないように、永遠のいのちを持つようにと、願っておられるのです。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを、望んでおられるのです。

「テモテへの手紙・第一」の2章には、次のように勧められています。

「すべての人のために、また王と、すべての高い地位にある人たちのために、願い・祈り・とりなし・感謝がさげられるようにしなさい。

それは、私たちが敬虔に、また威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。」

そして、4節の「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」

——と続いているのです。

すべての人ですから、皇室の天皇陛下ご夫妻も含まれます。皇太子ご夫妻・愛子さん。その他、皇室関係のすべての人たちも、含まれます。

ヤスクニ神社を、内外の反対を押し切ってまで、総理大臣として・また内閣閣僚として参拝しつづけ、神さまが忌み嫌われることを堂々とやっている首相や大臣たちも、主なる神は、そのひとり子をお与えになったほどに、愛されていて、滅びることのないように、永遠の生命を持つように、救われるように——と、望んでおられるのです。首相や大臣たちが救われるように、祈るようにとおっしゃっているのです。

大阪府の知事、高槻市の市長、みんなそうです。

〈真如苑〉の代表の方、〈創価学会〉の会長も…… その他、信じられないことかもしれませんが、テロ実行犯の一人一人ですら、主なる神は、そのひとり子をお与えになったほどに愛されているのです。例外はありません。

勿論、彼らの、神を神と認めない、神の前に大きな罪・小さな罪を犯しつづけ、偶像を神であるとしているような考え方・生き方を、主なる神が認めておられるわけではありません。

一人一人が悔い改めて、方向転換をして、神を神として信じる者となることを望んでおられます。

その時を、限りない忍耐と寛容をもって、待ちつづけておられるのです。

しかし、いつまでも、ということではありません。

今開かれている門が、閉じられる時が来るのです。今ゆるされている生命(いのち)が、ついに、取り去られる、その時までです。

その時、今あなたに対して開かれている門も、丁度、“ノアの箱舟”の扉を、主なる神さま自らが閉ざされたように、閉ざされてしまうのです。

一人一人の生命が取り去られる時、それが最終の期限です。

約束されている、神の愛も、それ以上は、あてはまらないのです。

神を、神の愛を拒否しつづけた者は、当然のことですが、生きてきた自らの生き方に、自己責任を負わなければなりません。だれのせいにすることもできません。だれかのせいにして、のがれるということはできません。

神なんかいるもんか、神なんか信じるもんか、と言っていたのに……、あるいは、他(ほか)の神々を信じていたのに……、だれでも死んだら、何と、天地万物の創造者であられる主なる神の、さばきの座につかなくてはならないのです。

お釈迦さんでも、大日如来でも、阿弥陀如来でも、アラーの神でもなくて、主なる神の前に立たなくてはならないのです。

「ルカの福音書」16章には、“ハデス・よみ”で苦しんでいる金持ちのことが記されています。

「私は、この炎の中で苦しんでたまりません。私には、兄弟が5人いますが、彼らまでこんな苦しみの中に来ることのないように、よく言い聞かせてください！」 そのように叫び、訴えています。

「ヘブル人への手紙」9章には、有名なみことばが記されています。

「人間には、一度死ぬことと、死後にさばきを受けることが定まっている。」

旧約聖書の「エゼキエル書」の18章には、次のような御言葉があります。

「あなたがたの犯したすべてのそむきの罪を、あなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。—神である主の御告げ— だから、悔い改めて、生きよ。」

それにしても、死後にさばきがあるのだとしたら…… 大変ですね。どうしよう！

私なんか、こんなエエ加減なことをしていて、大丈夫なんやろか。本当に天国へ行けるんやろか。

主なる神さまのさばきを受けて、ダメだなんて言われてしまうのとはちがうんやろか？！

ああ、心配だ。心配だ。心配だ。

大丈夫です！ 信じる者は、さばかれないのです。

信じない者は、神のひとり子の御名を信じなかったので、さばかれるのです。

厳密に言いましたら、すでにさばかれているのです。地上での日々の生活の中でも、罪の結果としての苦難とさばきを、日々、経験していつているのです。

「ヨハネの福音書」3章16節につづく、18節をご覧ください。

「御子を信じる者は、さばかれない。信じない者は、神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。」この御言葉(みことば)の通りです。

「御子を信じる者は、さばかれない。」“御子を信じる者は”とあることに注目しましょう。

3章16節のみことばもそうでした。

「御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」“御子を信じる者が”といわれているのです。

だれでもかれでも、何を信じていても、みんな天国へ行けるなどとは、ひと言もいわれていません。

神は実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世のすべての人たちを愛されました。愛されています。

一人の例外もありません。

御子を、世界中の罪人(つみびと)の救いのために、惜しみなく、十字架につけられたのです。それは、神が愛されているすべての人たち、あなたや私が、滅びることのないためです。

この「滅びる」という言葉は、消えてなくなるということを意味してはいません。

永遠の地獄、聖書的な言い方で言えば、「ゲヘナ」。「滅びる」とは、このゲヘナにおいて永遠に苦しむことです。消えてなくなるわけではありません。永遠に、苦しみ続けるのです。

新約聖書には、「ハデス」という言葉と、「ゲヘナ」という言葉が出てきます。

旧約聖書では、「ハデス」に対応するものとして、「シェオル・よみ」という言葉が出てきます。

私たちが使用しています(新改訳聖書)では、「地獄」という言い方は出てきません。

「地獄」という言葉は、仏教の「極楽と地獄」という言葉と混同して理解されてしまいそうですので、「地獄」とは訳さないで、原語をそのまま用いています。

「ハデス」というのは、“死んだ者たちが、終末のさばきを待つ間の、中間状態で置かれる場所”を意味します。

「ゲヘナ」というのは、“神の究極のさばき・最後の審判によって、罪人が入れられる苦しみ場所”を意味します。

先に出てきました、「ルカの福音書」16章の金持ちは、ハデス・よみで苦しんでいたのです。

このあと、最後のさばきによって、悪魔や悪霊たちといっしょに、ゲヘナに投げ入れられることになり、ゲヘナにおいて、永遠に苦しむことになります。

消えてなくなるわけではありません。永遠に苦しみ続けるのです。

自己責任で、自らの選択で、御子を信じることを拒否したのですから、自分が選んだ通りの道を歩んでいくことになります。

こんなはずではなかった！ と思っても、だれのせいにすることも出来ません。

極楽があると思っていたのに！ 神社やお寺参りもしたのに！ 西国・四国巡礼八十八ヶ所巡りもしたのに！ お賽銭や寄進もしっかりしたのに……！

そして、こういうことにならないための、決定的な期限となるのが、開かれている門が閉じられる時となるのが、一人一人の地上での生命が取り去られる、その時なのです。それが、最終期限なのです。

すべての人に約束されている、神の愛も、それ以上は、あてはまらないのです。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

一方、神の愛を、「ありがとうございます。」「感謝します。」と言って、受け取った人はどうなのでしょう。「永遠のいのちを持つためである。」「永遠のいのちを持つ」のです。

十字架に上げられたイエスを、【キリスト・救い主】 — 「キリスト」というのは、名前ではなくて“救い主”という意味ですが — 、イエスを、【キリスト・救い主】として信じ、仰ぎ見る者は、誰であっても、罪の支払う報酬である「死」から解放されて、「永遠のいのちを持つ」ことができるのです。

神の愛は、罪人を救うために、そのひとり子を十字架につけるためにお与えになったほどに、深く、また決定的なものでした。

この神の愛のゆえに、どんな地域の、どんな人でも、御子を信じ、その救いのわざを受け入れることにより、「永遠のいのち」を持ち、「神の子どもとされる特権」を与えられるのです。

使徒ヨハネは、今回のみことばだけではなく、【ヨハネの福音書】のあちこちに、また、【ヨハネの手紙】を通して、「永遠のいのち」について、くり返しくり返し、私たちに語りかけています。

- ・ 御子を信じる者は、永遠のいのちを持っています。
- ・ わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな、永遠のいのちを持つことです。
- ・ まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は、永遠のいのちを持ちます。
- ・ 永遠に生きます。
- ・ 永遠のいのちを持っています。
- ・ 信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。

以上は、【ヨハネの福音書】からの引用です。

つづいて、【ヨハネの手紙・第一】にも、くり返し記されています。

- ・ 私たちは、死からいのちに移ったことを知っています。
- ・ そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そして、このいのちが御子のうちにあるということです。
- ・ 御子を持つ者は、いのちを持っています。
- ・ 私が、神の御子を信じているあなたがたに対して、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

「あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。」とありましたよ。

「永遠のいのち」に対する大きな誤解として、「永遠のいのち」は、私たちが、地上での生涯を終えて、天国に行った時に、初めて与えられるものだ、と思っておられる方はおられないでしょうか。

ヨハネも、「信じているあなたがたに、あなたがたが永遠のいのちを今すでに持っていることを、よくわから

せるために、これらのことを書いたのだ。」と言っています。

2000年前からすでに、こうした「永遠のいのち」に対する誤解があったのです。

「永遠のいのち」は、死んでからはじまるのではなく、私たちが、イエスさまを信じた時からスタートします。

使徒ヨハネは、続けます。

「私が、神の御子を信じているあなたがたに対して、これらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

私たちは、真実な方のうちに、すなわち、御子イエス・キリストのうちにいるのです。

この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。」

御子イエス・キリストご自身が、「永遠のいのち」なのです。

私たちは、永遠のいのちであられる方を信じ、受け入れ、永遠に生きる者とされたのです。

この私たちの肉体は、いつか死を迎えますが、その時、主イエスは、私にこのように言ってくださいます。
「まことに、あなたに告げます。あなたは今日、わたしと共に、パラダイス・天国にいます。」

そして、主と共に、又、先に召された愛する人たちと共に、永遠のいのちをもって、永遠に生きるのです。
私たちの、何ものをもっても代えることのできない「希望」です。

ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝しましょう。

ひとこと、お祈りいたしましょう。

天のお父さま。そのひとり子をお与えくださったほどに、この私を愛してくださいました。御子を信じる私が、滅びることなく、永遠のいのちを持つためでした。ことばに表せないほどの賜物のゆえに、感謝します。

まことの神、永遠のいのちであられるイエス・キリストの御名によって、祈ります。 アーメン